
空へ

伊吹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空へ

【著者名】

伊吹

N8296D

【あらすじ】

真っ青な空に一筋の黒煙が昇っていく。父が死んだというのに、私は泣いてすらいなかつた。母は私に「お父さんの子で幸せだった？」と尋ねる。その答えは「イエス」でもあり「ノー」でもある。きっと幸せだつたし、たぶん不幸だつた。

さんさんと降り注ぐ太陽の光が眩しくて、少し目を細める。何処からともなく聞こえてくる蝉の鳴き声が耳に響く。こめかみから顎へと汗が流れそうになり、私は上着のポケットから白いハンカチを取り出して顔を拭つた。黒いスーツは熱を吸収しつづけ、しばらく、この熱地獄からは解放されそうにない。

夏だ。雲ひとつない青空が、より一層、騒がしい季節を盛り立てている。

父さんも最後くらい、静かな季節で眠りにつけばよかつたのに。最後の最後まで、父は父らしかった。父と真夏の季節は、何をするにも派手で騒わがしい所がそつくりだ。

真っ青な空へと一筋の黒煙が昇っていく。

火葬場の空気はどこか乾いているように思えた。喉の奥がカラカラと乾いて痛い。思わず眉をひそめてしまった。今のコンディションはこの上なく最悪だ。体の水分は汗として流れ出していく、目頭まで運ぶ余裕はない。

そんな私の姿を、遠縁の女性たちが「可愛げのない娘だ」と評しているのが、蝉の声に紛れて聞こえてきた。

「葬式」という非日常に、昼ドラマのような展開でも求めているのだろうか。残念ですね、おばさま方。ご期待に添えそうにありません。

彼女たちの昼ドラマの名脇役になれなかつた私は、主役にされていだらう母へと視線を向けた。

「母さん」

「……今日は、お父さんね、もうあんなに遠くまで行っちゃたの

火葬場の細い煙突からのびている黒煙を、そのか細い指でさして
いた。小さい頃は何よりも頼もしく思えた母の手も、気がつけばヨ
レヨレなおばあちゃんの手になっている。

私が大人になったと同時に、母もまた老けた。

「そうだね」

私はどう返していくのか困り、無難に答えた。

ベンチに腰かけている母の隣に座り、横目で母の顔を見た。母は
瞬きさえも忘れて、じつと空に昇っていく黒煙を、父の姿を見つめ
ている。

その瞳に、涙の影は見当たらない。ただ、じつと、黒煙の行方を
見守っている。

「母さん、父さんと結婚して幸せだった？」

ふいに、そんなことを聞きそつになってしまった。言葉は喉元ま
で出かかっていたが、心の奥底へと押しやる。その問いをして、母
から返ってくるだろう言葉は、せつと否定の言葉だ。

私がみてきた限りで、母が父と一緒にになって幸せだったとは思え
ないからだ。

「……ねえ、今日は」

「何、母さん」

「お父さんの子どもで幸せだった？」

「え？」

「今日は、お父さんの子どもで、幸せだった？」

何を聞かれているのかよくわからず聞き返すと、母はハツキリとした声で同じ問い合わせ繰り返した。

上半身ごとこひらに向き直り、瞳の中には黒煙ではなく私の姿が映し出されている。さっきまでの呆けたような顔とも、普段の穏やかな顔とも似つかない顔をしていた。

眉は今にも下がりそうだし、まっすぐ私を見つめる視線もどこか揺らいでいる。母は私の上着の裾を握つて、「どうなの?」と続けた。

母さん、どうしてそんなに不安そうな目で私を見るの。

父の子どもで幸せだったのか。私の答えは「イエス」でもあるし、「ノー」もある。きっと幸せだったし、たぶん不幸だった。

父と母の馴れ初めは、私にはわからない。10代で祖母の家を飛び出した父が、10年ぶり里帰りした時には、父の傍らには母がいたそうだ。

「ミヨさんは、シゲにはもつたいないお嬢さんだあ

私は小さい頃、祖母の家に預けられることがしばしばあった。そのたびに祖母は私を膝の上にのせて、そつまつていた。

「ねえ、ママとパパはあーつ?」

「大丈夫、大丈夫。今日子ちゃん、大丈夫よ

父にも母にも会えないさみしさから、私はよく愚団つて祖母を困らせたものだ。祖母は大丈夫と繰り返しながら、弱々しい腕で込め

られるだけの力で私を抱きしめてくれた。祖母の声はいつも震えていて、自分自身にも言い聞かせていましたのかもしれない。

「またお天道様が昇つたら、//ワセでもシゲもーっコリ笑って、
今日子ちゃんを迎えるよ」

「ほんとー？」

「おばあちゃん、嘘ついたことないだりつ~」

「うん、なーいっ！」

祖母は私に嘘ついたことは一度としてなかつた。

「今日子ーーー！迎えにきたぞーーー！」

「お義母さん、この度もご迷惑おかけしました」

祖母の言ひ通り、何日かすれば必ず父と母が一ツ口と笑いながら私を迎えて来る。

そういうことが小学校卒業まで、おばあちゃんが亡くなるまで続いた私の日常だった。

父は普段、残業だ出張だと忙しくしていた。けれど、田曜日だけは必ず家にいた。その日の母はいつも以上にじ機嫌で、私の大好物を作ってくれたり、時間制限されていたゲームを何時間しても怒らなかつた。

「今日子、何して遊ぼうか

「あのね、あのね、スーパー ファミコン」

「ゲームもいいが、こんな天気のいい夏の日は、外でパーティと遊ぼうぜ！」

「じゃあ、ラジコン走らせるーーー！」

「おっし、持つてこい！」

「はーい」

日曜日だけは、父を1人占めできる魔法の日だった。木登りだって、キヤツチボールだって近所の男の子に負けないほど上手かつた。人形遊びやお絵かきといった女の子らしい遊びを好まなかつたのは、父の影響が大きいと思う。今の趣味も、プラモ作りと男っぽい。

「今日子ちゃん、あなた、怪我しないようにね」

母はベランダから父と私に声をかけて手を振つていた。全力で遊んだあの夕飯が生きてる間で1番幸せだと、私は大袈裟ながらそう信じていた。

私は父も母も大好きだった。

全力で私と遊んでくる父も、おいしいご飯を作つて待つてくれる母も、私は大好きで仕方なかつた。

前編（後書き）

3話ほどで終わる予定です。
短編にあるつもりが長々と…。お話を短くできるようになりたいです……。

ここまで読んどへだれしあつがといひが二説。

私の親戚の女性たちは揃いも揃つておしゃべりだ。よくもまあ飽きないものだと思つ。

大抵は噂話や人の陰口。彼女たちの夫や姑といった身内から、隣人や仕事先のお得意さんまで。彼女たちのターゲットは止まるところを知らないらしい。

彼女たちの一番の話のネタになつた人物は、私の両親だろう。

「シゲさん、また浮氣したんですつてねえ」

「本当に毎回毎回、懲りない男ね」

「ミヨさん、浮氣されても、最終的にはシゲさんのこと許しちゃうから」

「それが男を調子づかせるつていうのに、ミヨさんつて馬鹿よね」

「私なんて1回でも浮氣されたら耐えられないわ、即離婚よつー」

「そうよねー！ミヨさんの神経疑うわあ～」

そんな井戸端会議を、こんな時に繰り広げるあなたたちの神経のほうが疑わしい。

祖母の三回忌、親戚が祖母の家 今では父の長兄夫妻が継いだ家に集まっていた。お坊さんもお寺へと帰り、法事がひと段落ついた時に始まつた井戸端会議。偶々、裏で話し合つていたことを通りすがりに、耳にしてしまつたのだ。

井戸端会議を聞いた私の感想は、否定できないな、だった。

中学に上がつたころから、日曜日すら父は家に寄りつかなくなつた。最初のころは、出張とか残業が原因だと、母は説明していた

が、1年もたてばそれすらも消えうせた。

「このころになれば、私も物事を察することが出来る年齢になつていて、祖母の家に預けられることが多かったのも、父が原因なんだろうと結論付けていた。私はなんともさめた子供へと成長した。

家に寄りつかない父、多分浮氣を繰り返しているだろう父。「嫌だ」と思わなかつたわけじゃない。複雑な年ごろだった私が、父の裏切りをたやすく受け流すことなんて不可能だ。うう。

それでも、私はなにもわからないフリをして、毎日をやり過ぐしていった。すべては母の為だ。

時々、私は深夜に目を覚ますことがあった。

深夜目が覚めて、自室の扉を開ければ、いつもリビングの方の明かりが控え目に灯っているのだ。リビングへと歩を進めれば、そこには、ソファーに小さく座っている母の姿があった。

「今日子、起きてたの？」

「なんかのど渇いて、目、覚めたの」

「そう、早く寝なさいね」

「……母さんは、寝ないの？」

小さく電気だけをつけ、テレビも雑誌も見ずに、ただただ、ソファーに座っている母。

「……うん、もう少しだけ、起きてるわ

まだ春先で夜は冷えるのか、肩にかけていたショールを掛け直しながら、「明日も早いんだから、寝なさいね」と私に微笑みかけた。

私は冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを取り出し、2階の部屋へと戻る。リビングのドアを閉める際に、もう一度母の顔を眺めた。

母はじっと、部屋の壁時計とにらめり、しながら、ソファーの上で小さく縮こまっていた。

「なんで寝ないの？」

とは聞けなかつた。もしかしたら、父が帰つてくるかもしれないと思い、母はああやつてじつと待つていてるのだろう。母の健気過ぎる行動が、心臓に痛かつた。なぜ、あんなにも母に答えてくれない父に、やつまでして恩くやうとするのか、私には理解しがたい。

たまに帰つてきたときの父は、相変わらずだつた。父が帰つたときだけ、母は笑顔だつた。

「今日子、ゲームやるかー？」

「あー、格ゲーは嫌」

「えつ！？なして？」

「私、絶対に父さんに勝てないじゃん。格ゲーはやんない」

「……今日子ちゃん、つめたーい」

「いい年こいたオヤジがいじけないで。シューイングは？」

「おおつーそしたら新作やるかー！」

私たちは外で駆け回るたりすることは無くなつたが、いつも2人でゲームなどをして遊ぶことは、小さい頃と変わらない日常。ハイテクションで遊びまわつていた子供のころより、格段にローテクションな高校生の私に、父は不貞腐れることも度々あつた。

子供のような父は、いつもにならつとも、全力で私を可愛がってくれていたのだと思う。

そんな私たちを、母は昔と同様にほほ笑みながら見守るのだった。

母はどんなに小さな体をせらりと小さくして、毎日のように深夜過ぎまで帰つてこない父を待つついても、父の携帯番号のディスプレイに、いつも見覚えのない電話番号が表示されていても、私は何も追及することはなかつた。

自由に生きている父さんはいいだらうけど。

ただ、待つしかできない母さんは、幸せなのだらうか?という疑問を心に秘めて。

中編（後書き）

3か月以上放置して、申し訳ありませんでした！

空へだけではなく、ほかの小説でも全く更新していなかつたというのに、覗いてくださつていた方々には、本当に感謝の言葉しか思いつかません。

これからもマイペースな更新になつてしまいますが、定期的には更新していくたいと思います。

母の問いに、走馬灯の如く父の思い出がよみがえる。

私は父の子どもで幸せだったか、否か。母の真摯な瞳に、どう答えればいいのか躊躇したが、正直に伝えるのが一番だと結論づけた。

「母さん、私ね。幸せだったかはわからぬの」

私のスースに力強くしがみ付いて母の手を握りとはずそうとする。しかし、ますます母は手に力を込めてしまい、外すことはできなかつた。

「でもね、父さんの子どもで良かつたとは思う」

幸せだったかどうかなんて、私にもさだかじやない。

ただ、私の頭をいつも豪快に撫でていた父の手は、確かに暖かかつた。家族みんなで笑いあつた時間は本当に楽しかつた。何より、父は父なりに私を可愛がつてくれたと思うから。

いつも自由で何物にも縛られない子供のような父を、今になつて思えば、私もどこか憎み切れてはいなかつたのだろう。

何ともやつかいな男に母は惚れたな、とつづく思つた。

「そつか、よかつた、本当によかつた」

母は私のなんとも中途半端な返答を聞くと、心底ほつとした表情をして、私から手を離したと思うと、ポツポツと涙を流しはじめた。とめどなく母に、私は焦らずにはいられなかつた。あんなにも惚れぬいた父の死にも涙1つ溢さなかつたのに、私の言葉でさめざめ

と泣いていたのだ。

私はどうしていこのかわからなくなり、母が泣きやむまで無言で隣に座っていた。

あのね、と母は遠慮がちに私に話をふつた。

「お母さんね、昔から、『いいお父さん』ことが好きだった」

「……そうだったね」

「出会ったときから、下供っぽいひとでね。でも、明るくて無邪氣で、大きな声で笑うお父さんになれ、惹かれずにはいられなかつたの。……お母さんの『田舎者』だったわ。付き合つたときも、結婚したときも、『すく』く幸せで。お父さんとの間に、今日子が生まれてもっともつと幸せになつたの」

父との思い出を紡ぎながら、母は本当に幸せそうな顔でほほえむ。

「浮気をね、初めてされたのはもうずっと前で、もつ想に出せないの」

来るのは拒まず、去るのは追わない。それが父のライフスタイルだったのかもしれない。母と同じように、父に母性をくすぐられた女性は多く、父はその女性たちとの逢瀬を決して止めないとはなかった。

「寂しがりだったのよ」と語りて、母は手を組めた。

「若いころはね、お母さんもいたわったのよ。愛する人のたつた

1人になりたいって「

だから、浮氣をされるたびに、浮氣相手と別れてくれと父と大げんかをした。今日子には、親の勝手で親のいやなところを見せたくなかつたから、お義母さんにあずかつてもうつてたのと、今になつて当時の裏話を教えられた。

うん、なんとなく気づいてたよ。

祖母は、いつ母が父を見放すだらうかと、いつも怯えていたから。「私が泣いて騒いだら、お父さんもその時の浮氣相手とは別れてくれたの」

「……でも、父さん、止めなかつたよね」

「そう、次から次に新しい浮氣が発覚して。随分としたから、お父さんはそういう人なんだつて気がついたの。甘えていいという相手には、誰にもでも甘えてしまう人。それがお父さんなんだつて」

白髪が交じりはじめた髪をかきあげながら、空へ上る黒煙を再び見つめる。私に言つたつもりでも、想いははるか彼方へ旅立つた黒煙へとむけられている。

「惚れた弱みでね、どうしてもお父さんから離れられなかつた。近くにいるだけでも、十分に幸せだつて思えたのよ」

すでに中年期にさしかかつた母には、若いころの強さはなく、老いとともに諦めることを覚えてしまつたのか。それでも、父に少しでも淡い期待をもつて、母は父を待つていたのだろうか。

「お母さんは、それでよかつたけど、今日子は私のわがまままでまわりこんでしまつた」

母が、両手で顔を蔽い隠した。ああ、また母は泣いてしまった。

「私にひとつては愛する人でも、今日子にひとつて良い父親だつたとは言えないし、私だつてあなたのことを一番に考えず、自分のわがままを突き通してしまつた……っ……」

母さん、いつも、私に負い田を感じての?

「……今日子、『じめつ』
「いい、母さん。その葉はわないで」
「今日子つ……」
「私、父さんの子で良かつたし、母さんの子で良かつた。それでいいじゃない」

お願いだから、その小さくなつてしまつた体をさらに縮こませないで。そんな母さん、見たくないよ。

「今日子、今日子。ありがとひ、本当にありがとひ。」

母は私に抱きついて、おじおじと泣き続ける。

母さんが、幸せだつたのなら、私はそれでいいと思つから、今までつらかった分、母が泣きつきるまで、背中をさすりあげたいと思った。

空へ昇つていぐ黒煙をみつめる。

父さん、私は父さんの子でも幸せだつたし、不幸だつたと思つ。

いつも全力でわたしを可愛がってくれたし、私は父さんの大きな手が大好きだつた。

いつも自分が一番で、母さんを泣かせっぱなしで、軽いところが大嫌いだつた。

でも、父さんと過ごした日々は楽しかつたよ。

私、今までわがままなんて、あまり言つたことなかつたね。最後くらい、お願ひ聞いてくれない?

自分の好き放題やつたんだから、これからは母さんを見守つてほしい。母さんだけを見守つて。

いい加減、一途になつてよね? 父さん。

ぴったり、3話に納まつてよかったです。本当にもうと書かたいこともありましたが、うまくまとまりず、最終的にこいつの終わり方になりました。ずっと前から書きたいと思っていたものなので、とりあえずかけて満足です。

オマケですが、父の名前は「茂彦」母の名前は「善代」でした。

じいじもで読んだんですね。ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8296d/>

空へ

2010年12月16日02時45分発行